

芸豪烈伝その32

ひよしがわしゆうすい
日吉川秋水



現在の浪曲は、たそがれではなく
「夜明け前」ですよ

文・おさだ衛



本名・河知 敏子。大正14年、大阪市うまれ。師匠は二代目・日吉川秋水。10歳、日吉川小ひさとして大阪や京都の舞台に立ち、天才の少女浪曲家として人気を博す。昭和12年にはNHKから『乃木将軍』を放送している。昭和41年、三代目・日吉川秋水を襲名。趣味は日本舞踊（名取りの腕前）、小唄。好きな言葉は心と実直。性格は「私は、くち不調法でアホ正直なんです」。十八番は『藪井玄以』『水戸黄門漫遊記』『太閤記』ほか。

明るくて春風駘蕩とした舞台。日吉川秋水の手柄をそのままに映し出す高座は心地よい。秋水は現在では女流で唯ひとりのケレン読み（滑稽よみ）だ。浪曲親友協会の副会長の重責も担う秋水師を京都の自宅にたずねた。

芸歴60年。秋水師の人生を語るときに母親のミサさんの存在を無視できない。ミサさんは二代目・日吉川秋水の妹で浪曲と浪曲界に通じていたひとだった。

「伯父の二代目・秋水からは芸談は聞きました、教えてもらったのは小唄くらいでした」

小学生になったころから、ミサさんは厳しく浪曲を仕込んだ。「母は物差しを持って、私がネタを覚えていないとピシリと叩くんです。早朝の3時くらいに起こされて、浜辺で声を出す練習もさせられました。寒稽古です。寒



辻 びら 繁

昭和十一年四月一日、生誕。大阪府。浪曲師、歌謡作家、俳優。



日吉川 秋水 師

昭和十一年四月一日、生誕。大阪府。浪曲師、歌謡作家、俳優。

京都の秋水師の自宅には戦前の公演のパンフレットやピラなど、おびただしい資料がある。この「辻びら巻」には小ひさは二代目・秋水の愛嬢とある。初舞台から天才少女の誉れが高かった。

くて、つらかったですよ」

母ひとり子ひとり。ミサさんは浪曲という芸を娘に体得させようと、心を鬼にしていたのだ。

「つらかったのは母だったでしょう。私ひとりに命をかけてきました。私が一人前になれるように、神さま仏さまに願をかけ物断ちをしていました。これが本当の母親かと思うくらい、すべてが厳しい人でした。母が芸を身につけさせてくれました」

過酷な稽古を強いる母と、健気に従う幼い娘。秋水師のお話をうかがううちに「中江藤樹の母」や「豊竹呂昇の母」の話を思い出し、こちらも胸に熱いものを感じた。（母親のミサさんは昭和47年、71歳で他界した）

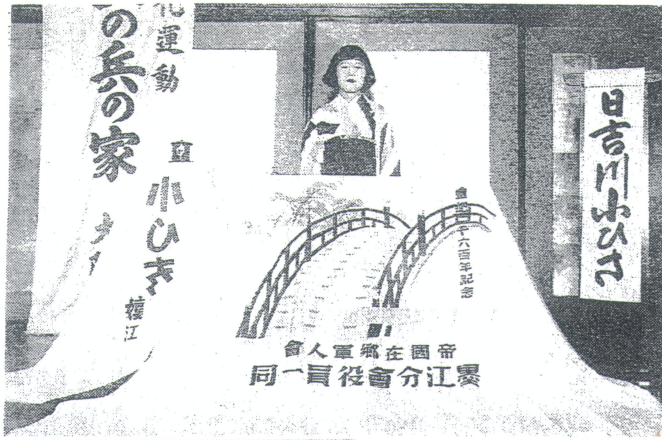
10歳に、信仰している岡山の金光教の御本府から日吉川小ひさという芸名をいただきデビューを果たす。当時は「お千代の貞操」「幻滅の忠治」などが演題の堅物よみだった。

新進気鋭の少女浪曲家として関西だけでなく全国的な人気者となった。

日吉川小ひさは一座を組んで全国を巡業したり、ロサンゼルスやサンフランシスコを巡業をしたり、伴奏を三味線でなくピアノ・ドラム・サクソスなどの洋楽じたてにして意欲作を発表するなど確固たる地位を築いていた。

そんなおり、小ひさに大きな転機が訪れた。昭和37年に伯父の二代目・秋

15歳の、小ひさ。軍人の慰問にも忙しかったころ。「あのころは『お千代の貞操』という文芸ものをかけていましたが、教えられるままに貞操なんて意味もわからず、いつていましたね」



水がこの世を去り、同41年に小ひさが三代目を襲名することになったのだ。「日吉川秋水は初代も二代目もケレン読みの大家です。ケレン読みは、お家芸ですから伝承しなくてはなりません。ですが女で、お笑いのネタは難しいんですよ。苦労はありますが、やりがいもあるんです。憂い節も人情ものも高座にかけたいのですが、お客さまに藪井(玄以)さん、水戸(黄門)さんと声を

昭和27年のアメリカ巡業の帰途、ハワイで梅中軒篤童と。秋水師の自宅には仏壇に篤童師の位牌がある。「私が母の次に崇拜する人です。大阪と東京の浪曲界を合同させようとしたり、浪曲界の発展のみを考えていた方でした」



「おかげさまで関西にも、たくさんの有望な若手が育ってきています。協会を平和で仲良く、浪曲のために一丸となつて、がんばりたいと願っております」
浪曲の未来は。
「浪曲がマスコミに乗らないのは、その内容だと思います。若い人に昔の言葉が通じない。新しい脚本で上演時間

掛けられると、いつものネタになつてしまふんです」
秋水師が考える浪曲の魅力とは。
「人を感動させることですね。浄瑠璃の世界でも60歳、70歳から味が出てくるでしょう。話の中身も歌舞伎と同様に腹の中で練つて練つて練りあげない。声がいい、節がいいだけでは、いかなものかと思ひます」
浪曲親友協会の副会長として苦心することとは。

昭和41年。大阪は道頓堀の朝日座での「三代目・日吉川秋水」襲名口上。左から松浦四郎、日吉川秋水嬢、「流れも清き日吉川秋水を今後ともよろしく」と挨拶する当人、その右は日吉川秋斎、三代目・吉田奈良丸。三日間、満員の入りだった。



を短くすれば、まだまだ可能性は十分あると信じています。いまは「たそがれ」ではなく「夜明け前」です」
芸の中身を本物にするまで一生かけて勉強していきたいと、生涯現役の力づよい決意表明をしてくれた秋水師。
大ベテランの知恵と経験が生かされるのは、これからだ。師の健闘を祈りたい。

浪曲 ... これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

36

52

浪曲家の皆さん... 頑張ってください。
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉